ポスター | 2-03 外科治療遠隔成績

## ポスター

## フォンタン循環その他

座長:中島 弘道 (千葉県こども病院)

2015年7月18日(土) 10:50 ~ 11:20 ポスター会場 (1F オリオン A+B)

III-P-081~III-P-085

所属正式名称:中島弘道(千葉県こども病院 循環器科)

## [III-P-085]フォンタン型手術後遠隔期に向けての心臓カテーテル検査指標 の推移

○金 成海<sup>1</sup>, 鬼頭 真知子<sup>1</sup>, 石垣 瑞彦<sup>1</sup>, 濱本 奈央<sup>2</sup>, 佐藤 慶介<sup>1</sup>, 芳本 潤<sup>1</sup>, 満下 紀恵<sup>1</sup>, 新居 正基<sup>1</sup>, 田中 靖彦<sup>1</sup>, 坂本 喜 三郎<sup>3</sup>, 小野 安生<sup>1</sup> (1.静岡県立こども病院 循環器科, 2.循環器集中治療科, 3.心臓血管外科) キーワード:フォンタン型手術, 心臓力テーテル検査, 遠隔期

【背景】フォンタン型手術後若年期・成人期へのフォローアップ項目は多岐にわたる。その中でも当科では、一般状態良好で再介入不要な F術後症例に対し、術後約1年、その後約3~5年毎に心臓カテーテル検査で評価する方針としている。【目的】成長に伴うフォンタン術後の経過の一側面として、心カテ循環動態指標の経時的変化を明らかにすること。【対象・方法】開院以来1988~2004年末までに施行されたフォンタン術後144例中,死亡・フォロー脱落・再介入いずれもなく10年以上経過し、前述の定期的心臓カテーテル検査を施行した45例を対象とし、長期にわたり再現性の高い指標である中心静脈圧(CVP)、肺動脈楔入圧(PAWP)の推移を検討した。フォンタン型手術施行年齢は中央値2.3(0.4-16.5)歳。心室形態は右室型単心室結合19例、左室型単心室結合15例、分割不能な両心室成分11例。術式は全例 total cavopulmonary connection (TCPC)で、心外導管31例、心内導管2例、ラテラルトンネル8例、肺動脈下大静脈直接吻合4例であった。【結果】術後早期(約1年)→中期(3-6年)→遠隔期(8-11年)の3期において、CVPは12.2±1.9 → 11.0±1.8 → 9.4±1.7 (mmHg)(各P<0.001)と有意に低下し、PAWPは6.6±2.2 → 6.5±2.0 → 5.6±2.1 (mmHg)(各NS、P<0.05)と遠隔期低下を認めた。早期から遠隔期のCVP低下については心室形態による差はなく、導管群に比してラテラルトンネル群の低下傾向は有意性を欠いた(12.5→→9.5 mmHg、P=0.053)。【考察】特別なイベントなく保たれたフォンタン型手術後では10年後の遠隔期に向けてCVP、PAWPが低下していく、今後さらなる多方面からの評価を加味し、循環動態を保持・向上させる取り組みが望まれる。